

## 「宗教的要求」について

堀尾 孟

「宗教的要求」というのは西田哲学の語である。しかし今は、この語が『善の研究』あるいは全西田哲学において如何なる意義と立場を表わしているかを改めて見ようとするのではない。ここでは、宗教が「宗教的要求」とか、後の用語では「宗教心」「宗教的意識」といわれる立場から究明されていることの意味、つまり、そういう立場に立つ宗教哲学が現代の宗教研究の状況下において有する意義を、差し当り、宗教一般の科学的研究といわれる宗教学との関係に於いて見ようと思う。

「どの流れの現代哲学も……ヒューマニズムについての究極見解では相対立する傾向に分裂している」とは、ユネスコの共同研究『社会および人間諸科学の主要研究動向』（一九七八）の「宗教哲学」における決論である。つまり、我々の思想や生活が神的究極的な存在と関係を有することなくしてはヒューマニズムは基礎づけられぬと見る立場と、科学的実証論理に基づいて宗教的言辭は無意味であるとし、宗教的確信というものを人間性の疎外と見る立場があると言う。この報告書でも、比較宗教史(宗教学)・社会学・心理学などの人間科学は、宗教学に「衝撃」を与え、新たな課題を突きつけたものとして取上げられている。宗教学は、これら諸科学がもたらす批判的諸成果によって宗教現象を否定的に解釈するか、あるいはそれらの立場と批判的に対決して宗教を再検討するかの課題を背負わされたというのである。要する

に宗教学の現状は、存在論的な方向にはニヒリズムの超克という課題に、またそれと不可分な形で、人間諸科学の諸成果とその立場とを如何に批判媒介するかという課題に直面しているものと見られ得るのである。

宗教学は近代ヒューマニズムを基盤として成立し、その立場は、宗教を歴史的社会的な一文化現象としてとらえ、その歴史的展開および一般の構造を実証的に解明しようとするものである。従って宗教学は、社会学・心理学・民俗学などと本質的に関連しつつ、それらの諸成果を総合する総合的な精神科学であると言える。この学は、例えば比較文献学的方法あるいは追感追体験という解釈学的方法を用いつつ、宗教の普遍的構造を客観的実証的に解明するという学の科学性を基本性格としている。精神科学の立場において宗教に固有な領域をそれにふさわしい方法によって解明しようとする宗教学現象学は、自然科学的な客観性を「素朴な妄想」(レーウ)と批判して、経験知の根源的事実性を現象学的解釈学的体験の立場から追体験の事実としてとらえるが、その場合にも、自ずからの立場を記述的として哲学の規範的な立場と俊別し、研究の科学的性格を保持しようとする。この立場の客観性は、厳密な即ち「根源的な経験主義」という意味での体験の直接的事実そのものにあり、また斯る立場においてはじめて、「体験された事実」の客観的な「純粹即事性」が保証されると見るのである。事象に則し事象自身に語らせると言う「純粹即事性」は、事象の中へ研究者が「自らを転置し」(レーウ)、事象の脈動を研究者の生に響かせるといふ追体験の真实性に基づく。「歴史の中に見い出される宗教概念を……我々の精神生活の内て同類の弦を共鳴させるような心理複合において眺めるといふ仕方描写せねばなら

ない」(レーウ)

しかし斯る「純粹即事性」の立場はどのような構造をもっているのであろうか。「共鳴」ということは対象の事実性が「同質的」に体験者自身の生の事実として成立して来ることを意味している。体験の事実の眞実性は、体験の事実が主客の「同質的」一致の場の開けとして成立して来るところにある。この事は研究者の側から言つて、「我々の魂の中で眠っているものを目ざめさせること」(レーウ)とも、また、理解は単なる追体験ではなく我々の「自発的産出作用」である(ワッハ)とも言われている。体験の事実は斯る主客合一的場の事実として成立し、逆に、斯る場の成立が即ち体験の事実の成立である。宗教現象学も斯る場の成立にその立場の基礎をもっている。しかし、この立場では斯る場の成立は、体験の事実そのものの上でそれとして自覚にもたらされず、体験の事実は、その事実に含まれる一方の極、即ち対象の事実、「体験された事実」として把握され、他方の極即ち「目ざめ」とか「自発的産出作用」という言葉で表わされる体験者の主体的生の事実は背後に隠されてしまう。つまり、主客の同質的共鳴として再成立する体験の事実は、どこまでも主に対する客の事実として再び主観客観という両極の関係の上で把握される。体験の事実をそのように把握する所に「純粹即事性」を主張する立場なるものが成立し、従つて今度はその立場から改めて体験の場即ち「共鳴」の場が把握しなおされることになる。そこに、経験的科学的の立場にとつては形而上学的とも言える人間という概念が、体験の従つて宗教現象学の基礎概念として持ち出されて来る。曰く「本質的に人間のなものは常に本質的に人間のなものであり且つ斯るものとして理解可能である」(レーウ)。自ずからの立場を客観的記述

的と為す宗教現象学が、その立場の根本的な保証を「人間」の概念に求めるとき、レーウが言う如く立場そのものの「危険」が露になる。しかしこの立場では、宗教現象の中核はこの危険を敢えて冒さねば明らかにならぬと考えられ、自ずから「経験的事実の学と哲学的考察との橋梁」即ち「第三のもの」と見做す。この「第三」と称する所にはこの立場からする宗教哲学への批判が含まれている。「あつた」事実によらずただ人間とか精神という理念から宗教の理念を構築して来た宗教哲学を「独断的確信」(M・ミユラー)とする批判がある。宗教哲学に対する斯る警戒は、ミユラーが宗教諸事象の科学的研究によつて「凡ての証拠事実」が出揃つたとき、はじめて新しい宗教哲学が始まると見て以来、宗教に一貫する態度であると言えよう。しかし、宗教学は結局、宗教というものを近代ヒューマンイズムの中で如何に位置づけるのかという問いは、立場上宗教学になじまぬ難題であるにせよ、宗教学そのものの意味を問うものとして常に宗教学者の足下をおびやかす問いである。ミユラーの如く時間的に後とするにせよ、レーウの如く本質的に後とするにせよ、宗教学にとつて宗教哲学は保留された形になっている。その理由は「証拠事実」にある。この故にまた新しい宗教哲学は、斯る証拠事実に基づいた宗教学的宗教哲学でなければならぬとも言われる。この「証拠事実」が宗教哲学への「衝激」であるならば、宗教学的宗教哲学は、斯る証拠事実およびその立場を批判的に媒介し得るものでなければならぬ。斯る課題に対して「宗教的要求」の立場は基本的意義を有すると思われる。

「宗教的要求は自己に対する要求である。我々の自己がその相對的にして有限なることを覚知すると共に、絶対無限に合一して

これに由りて永遠の眞生命を得んと欲するの要求である」〔善の研究〕。「宗教的要求」は自己が何かを要求することではなく、「自己に對する要求である」。自己はむしろそれによって自己の有限性を「覚知」して「眞生命を得んと欲するの要求である」。この故に「宗教的要求は我々のやまんと欲してやむ能わざる大なる生命の要求である……」と言われる。「大なる生命」から「永遠の眞生命」へという動きにおいて宗教的要求があり自己の「覚知」がある。斯る「宗教的要求」が言い出される基盤は「純粹經驗の立場」である。これは周知の如く、「自己の意識状態を直下に經驗したとき、未だ主もなく客もない、知識とその対象とが全く合一している」と説明される。我々が何かを經驗するとき、その經驗の基礎事実として主客合一ということがなければならず、斯る合一の場の開けが、經驗的事実の事実性を成立せしめるのである。この立場の特色は、主客の關係が關係自体の成立する場（直下）にまで掘り下げられると同時に、主客の關係が斯る根源的な場の自己限定（「動かすべからざる事実」として、關係の現場「意識状態」の「直下」）で自覚化される所にある。すなわち經驗の事實はその最も厳密にして根源的な意味において、主客合一の場が自己自身をそこに限定し出す事実であり、斯る場の自己限定ということが即ち我々が対象を知り対象が我々に対象自身を示して来るという經驗の事實に外ならぬということである。經驗の事實は經驗された客体の事實に留まらず、それは同時に經驗する主体の主体的事実でもあるということである。一切の知識は斯る純粹經驗の自覚的事実として成立している。ただその事実が再

び抽象的主観の立場から客観的として把握されるとき、いわゆる対象論理の立場が成立するのである。それ故この立場では、事實は本質的には「人間」の生の事実と見做されながらも、ただ「あった」事実として我々を過去から規定するものと見做され、事實を知る者の生の事実として主体的自覚の内容とはなつて来ない。「宗教的要求」というのは、斯る対象論理の立場をその根源的基礎事実の方向に破り出て、主客合一という純粹經驗の根源的統一を自覚的に得んとする要求である。「我々は知識においてまた意志において意識の統一を求め主客の合一を求め。しかしこれはなお半面の統一にすぎない、宗教はこれらの統一の背後における最深の統一を求めるのである」。

事象がどこまでも事象自身を語ることが即ち知る者の主体的な存在の開け（自覚）として成立し、またその逆でもあるということ、斯る主客相互の働きそのものが場所の自己限定ということである。宗教的要求の立場は、その要求が自己の要求ではあつても、自己が、要求するのではなく、「大いなる生命の要求」、即ち場所の自覚的自己限定に外ならない。斯る限定は「物となつて見、物となつて聞く」とも言われる。

純粹經驗の立場は純粹即事性の基礎的事実を自覚化する立場であると言え、斯る立場において言われる「宗教的要求」からの宗教の究明ということは、我々に、宗教事象の純粹に記述的な研究が同時に宗教の亦我々の「あるべき」方向を照らし、また逆に宗教の規範的な研究が「あった」事実の解明に転じ得る可能性を根源的に開示すると思われる。